

医療宣教師“John C. Berry”がめざした 医学校設立運動について

布施田哲也

公立丹南病院

受付：平成25年7月2日／受理：平成26年8月27日

要旨：アメリカン・ボードの医療宣教師ベリーは1872年来日し、西洋医学の普及や宣教に多大な貢献をした。明治以降医学の模範はドイツ医学となった。同志社の新島襄やベリーは、旧来の多くの日本人医師が腐敗していること、またドイツ医学は懐疑的で無神論的であること、宗教や道徳に配慮した医学校がないことを憂いており、京都でキリスト教主義の英米医学を範とした医学校の創設を考えた。在日プロテスタント宣教団の多くは、この構想に賛意をしめしベリーはStatementを用意し医学校設立のための基金集めを米国で展開した。医学校構想は超教派による連合医学校構想に変更となったが、最終的にはアメリカン・ボードの日本宣教師団の反対で実現しなかった。

キーワード：ベリー、医療宣教師、新島襄、キリスト教主義の医学校、声明文

はじめに

江戸時代末より日本は海外との交流が飛躍的に増えるに伴い貪欲に西洋文明を取り入れていった。各分野で西洋のものが取り入れられていったが、大きな変化があった分野の一つに医学があげられる。明治政府は、医学については漢方医学ではなくて西洋医学を主として取り入れること、また1869年にはドイツ医学に模範を求めることを決め、ドイツ語による医学教育が大学東校（東京大学医学部の前身）で始まった。その後、各地に医学校が創設され、御雇い外国人等を採用しドイツ医学を基にした医師養成を行っていった¹⁾。

一方、同志社の創設者新島襄や医療宣教師John Cutting Berry（以下 ベリー）はキリスト教主義にもとづく英語による英米医学を基にした医学校を京都に創設したいと考えていた。1880年代にベリーと新島襄がめざした医学校設立運動および設立断念にいたった経緯についてはある程度明らかになっているが、基金集めのために米国でベリーによって展開された設立運動や断念に至った

経緯、その後の展開の詳細については十分とはいえない²⁻⁴⁾。

1884年にベリーは日本における医学校設立運動の声明文「日本におけるキリスト教主義に基づく医学校・病院・看護師養成学校の可及的速やかな設立を求める声明文および在日宣教師等による推薦文」“Statement showing the urgent necessity of establishing a Christian Medical School, Hospital, and Training School for Nurses in Japan and Commendatory letters. Philadelphia. May 19th, 1884”（以下Statement）をフィラデルフィアで作成し医学校設立運動を1885年にかけて米国各地で展開した⁵⁾。Statementの存在はあまり知られていないが、130年の時を経て読んでも理念は現代においても十分に通用するものである。Statementの紹介とベリーの米国で展開された医学校設立運動の推移を時系列でみていく。

I 医療宣教師ベリー

ベリー（図1）はアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）より



図1 John Cutting Berry (『日本に於けるベリー翁』より25歳ごろ)

1872年25歳で日本に派遣されたジェファーソン医科大学卒の医師の資格を持つ宣教師である⁶⁾。ベリーはアメリカ合衆国メイン州に生まれ4歳の時、船長だった父が死に叔父の家に引き取られた。祖父は、聖書をしり朝夕に規則正しく祈りをささげる人であり17歳の時に受洗した。21歳の時、荒れた海に小舟で漕ぎ出し命の危険を感じる経験をした。「初めて神様が何かのために私の生命を護って下さったのだと強く感じました。そして来るべきこれからの生涯を神の示し給う導きのままに従おうと固く心に決めたのでした。」と自叙伝で記載している⁷⁾。働きながらボドウィン大学を卒業後、医師となることを決心し1871年にフィラデルフィアのジェファーソン医科大学を卒業し1872年6月に来日した。神戸の生田神社前で貧しい人々の施療所を設け、また神戸監獄を訪ね、重病者を治療した。この時の獄内事情を記した獄舎報告書は、内務卿大久保利通に届けられ、日本における監獄改良運動の端緒となった。1878年、岡山に移って医療伝道に従事した。一時帰国のあと1886年京都に移り、病院、看護婦学校の設立に参加し1887年同志社病院院長に就

任した。1893年日本を去りマサチューセッツ州ウースターの市民病院で眼科・耳鼻科を担当、軽費病院の訪問医を勤めた。1912年勲三等瑞宝章、1918年には25年ぶりに日本を訪問している。ベリーの人生と仕事については、娘の書いた伝記と勲三等瑞宝章と再来日を記念に日本人有志がまとめた本がある^{7,8)}。ベリーの容姿雰囲気については「ほとんど東洋的ともいうべき礼儀と上品な態度で上流階級や有力な地位にある人々にたいへん好意をいだかれ、政府から伝道事業をはじめの重要な機会を何度も得てきている」と記載されている⁹⁾。

同志社創立者の新島襄より京都でのキリスト教主義に基づく医学校を設立する計画を1882年から1883年にかけて持ちかけられている。ベリーらの医療宣教師については、長門谷洋治や井上勝也の詳細な先行研究があり、また長門谷洋治にはベリーのアメリカン・ボード本部にあてた書簡翻刻の仕事がある¹⁰⁻¹²⁾。ベリーの医学校設立運動については、長老派教会関連文書より医学校設立運動を追った亀山美和子や、最近では京都看病婦学校とベリーの活動についての小野尚香、高等教育体制確立に向けての行政とキリスト教界との関連よりみた田中智子らの詳細な先行研究がある¹³⁻¹⁵⁾。

II 国内での動き

医療伝道について(大阪全国宣教師会議 1883年4月)

1883年プロテスタントの全国宣教師会議が大坂川口居留民地にて開催された。多岐にわたって報告討論されたが、医療伝道についても取り上げられ、エジンバラ医療伝道会の医療宣教師パーム師(Theobald Palm)による「医療伝道の動向」“The position of medical missions”と題した基調講演と質疑応答が行われた。長い隔たりの後の海外との交流の中で、日本人は西洋医学の優位性を深く認識することになり、近年、医学校や病院を設立し外国人教師をお雇いとして雇用し全国に広めている現状が報告された。医療宣教は派遣された国でその国の医学の進歩に寄与し、できれば医療伝道活動に将来携わる人材を育てることとしてい

るが、日本においては医学校に先を越されていた。一方、これらの医学校でうまくいっていない点は、実践的な臨床指導の分野であると語られた。

また医療伝道では、身体のみでなく魂にも働きかける癒しの意義が強調された。質疑応答では、横浜のヘボンより日本においては医学校がすでに多数できている状況にあり医療伝道の必要性が乏しくなっていることが報告された。一方来日10年30代後半のベリーよりは神戸や岡山での医療実践を踏まえうえて、今は日本にとって医学教育の黄金時代であるという認識を示し、医療宣教師は今こそ医学教育に力を集中しキリスト教信者の日本人医師の養成に力を注ぐべきであるとの意見が述べられた¹⁶⁾。

新島襄の医療観

明治六大教育家の一人である新島襄（1843–1890、図2）は、西洋文明とキリスト教を深く学びたいと考え1864年江戸より函館経由で単身脱国した。その後10年間のアメリカ生活の間には、岩倉使節団に同行し欧米での教育視察にも同行している。日本に必要なものはキリスト教の布教と教育であると考え、1874年准宣教師として帰国し布教活動以外に教育機関の設立をめざした¹⁷⁾。

1864年新島襄は函館から単身脱国を行う前、ロシア司祭ニコライ師と生活を共にした。函館では、ロシア皇帝がすべての経費をまかないロシア人医師が運営する病院を見学する機会を得た。新島襄は、函館のロシアの病院とは比較にならないような貧弱な日本の医療提供体制を放置している幕府政府の現状をととても憤慨していた¹⁸⁾。新島襄の儒教社会、偶像崇拜社会を見つめるまなざしにはとても厳しいものがあり、医学の教育も変えていきたい、西洋に学ぶべきだという思いがあった。

新島襄からの手紙（1883年5月5日）

新島襄は、1875年の同志社英学校の開設以後は法学部・神学部・医学部等をそなえたキリスト教主義に基づく大学の設立構想を持っていた。キリスト教主義とは、隣人を愛し他者に仕える心をはぐくみ相手の立場になって考える「愛と奉仕の



図2 新島襄 (Joseph Hardy Neesima) (1880年 堀写真館コレクション)

精神」を尊重するキリスト教を基本に据えた教育である。

新島襄は1880年代早期より大村達斎の洞酌医学校との連携を模索していた。この連携が、大村側の事情で1882年に頓挫したあと1883年5月新島襄は同志社理事との連名で当時岡山にいたベリーに医学教育の必要性和医学校創設への協力を訴えた請願起案文の書簡を送った¹⁹⁾。

その手紙で新島襄ら同志社関係者は、10項目にわたりキリスト教主義に基づく医学教育が必要である理由を説明している。主たる点は、この国の大抵の医師が悲しいほどに腐敗していること、ドイツ医学が官立大学を中心に浸透してきていること、医学校設立の理由が純粋に学問的・専門的であって宗教や道徳という面には全く配慮されていないことを危惧していた。また既存の医学校では完全にドイツ語とドイツの教育方法が用いられており、ドイツにのみ限定しすぎると視野が狭く自己中心的になることも理由にあげられていた。英米医学は書籍も多く臨床教育を重視しており、

英語による医学教育も大切であるとの認識を示していた²⁰⁾。

請願起案文の概略は、医学校設立に必要な外国人教授陣の派遣や医療機器の購入費用を外国有志の基金でまかなうことができれば、起案者（同志社）は、その事業で必要とされる寄宿寮や講義室、病院等の建物や土地をできるだけ速やかに確保することを保障するといった内容であった。二人の思いは共通点が多く、アメリカン・ボード本部とも連携することを確認のうえベリーは医学校設立運動の先頭に立って関わることになった。国内ではキリスト教に理解のある篤志家は少ないため、英米の篤志家を中心に基金を集める計画となった。

在日宣教師への手紙（1883年5月19日）と返答

ベリーは京都での医学校設立運動のための基金集めを海外で展開する前に、国内プロテスタント関連団体の主だった人物に対し「キリスト教主義に基づいた医学校・看護師養成学校の設立理由書」“Reasons favoring the establishment of a Christian Medical School and Training School for nurses in Japan”²¹⁾を送付し事業の遂行についての理解を求めた。京都の地でアメリカン・ボードと同志社の連携の下キリスト教主義の医学校・病院・看護師養成学校を設立運営していくことに対する意見を求めたものであった。

長老派教会へボン師²²⁾、オランダ改革派教会バラ師²³⁾、カナダウェズレー派マクドナルド医師²⁴⁾、改革派教会ヘンリー・スタウト師²⁵⁾、バチスト派ネイサン・ブラウン師²⁶⁾、英国聖公会チャールズ・ウォーレン師²⁷⁾、米国聖公会ヘンリー・ラニング医師²⁸⁾、北米伝道協会ヤコブ・ハツラー師²⁹⁾、米国聖書協会ヘンリー・ルーミス師³⁰⁾ 各氏より賛同の返答を取り付けた。

ヘボン師は、日本にもキリスト教主義の学校が必要であるというベリーの意見に賛同を示し、京都には熱い志を持った同志社関係者がいて最適地ではないかと返答した³¹⁾。

またバラ師は、キリスト教主義の医学校が日本に必要であるというベリーの考えに賛同し京都はとて適切の地であると述べている、また京都で

成功した暁には次は東京にキリスト教主義の医学校を作りたいと述べている³²⁾。

マクドナルド医師よりは、日本で英語を通じて医学を習得したいと思っている人が多いこと、日本の倫理観の向上ならびに福音伝道の上でもキリスト教主義の医学校がとて有用であるとの認識を示した。また設立機関は一流のものにすべきであり卒業生は、帝大卒業生と同等に優秀で聡明である必要があるとの意見を述べている³³⁾。

III 海外での運動の反応

アメリカン・ボードとの調整

1884年1月末で岡山での勤務の契約が切れた後、ベリーは一時帰国した。一時帰国の目的は、キリスト教主義の医学校設立のための基金集め・人材探し・支援団体の設立であった。

3月12日に横浜を出国したベリーはサンフランシスコに到着し4月17日フィラデルフィアに到着した。到着後、アメリカン・ボード本部と調整に入った。アメリカン・ボード本部の諮問委員会と話し合うも、本部は多額の基金を集めることや事業をおこなうことへの戸惑いがあり、決議等の方針決定にはいたらなかった。

またアメリカン・ボード海外伝道部担当のクラーク師³⁴⁾より趣旨自体は賛成ではあるが、アメリカン・ボードが主体となって取り組み、資金集めに全面的に協力していくことには事業の大きさの面や集める資金が多いことから懸念が示された。

クラーク師は、5月9日付けのベリーあての手紙で以下のように述べている。

「伝道の目的のために使われるべき基金をこの事業には転用できないが、この事業を推し進めることに関心がある仲間募金をお願いすることはよいことであると考えている。あらゆる階層のキリスト教信者の篤志家や日本のキリスト教下での西洋文明化に大いに利益があり、また将来に向けて有用と考えられるこの事業に特別の関心がある仲間がこの事業を心より推奨する。医学校が設立された際には、委員会は君がその学校に関与していくという前提のもとに、米国内でこの目標を

推進するための時間と機会を喜んで提供する。委員会は、この事業に同意することによって多くの貢献を果たしていると感じている。」³⁵⁾

米国でのプロテスタント各派の好意的反応

アメリカン・ボード本部は上記のような消極的の反応をしめしたが、長老派教会の海外伝道主事エリンウッド師³⁶⁾やラウリー幹事はとても好意的の反応を示し、オランダ改革派教会の海外伝道主事コップ師³⁷⁾、メソジスト監督教会 中国・日本担当のワイラー卿³⁸⁾もそろって深い関心を示した。

長老派教会海外伝道部のエリンウッド師よりは、「日本で日本人医師の育成のためのキリスト教主義の医学大学を設立することは、宗派の違いを超えたプロテスタント全体の事業として推進すべきと考える。」と賛同の意を伝えた³⁹⁾。

またメソジスト監督教会の日本・中国の担当執事 ワイラー卿よりも「西洋医学の日本への紹介は、キリスト教と共に浸透すべきであるということがとても大切な点であるとおもっている。私がうれしく思うのは、日本のキリスト教信者自らがこの原則の重要性を理解していることであり、自分の子息達が懐疑主義や物質万能主義に惑わされることなく医学の勉強ができる学校を望んでいることである。」との賛意が示された⁴⁰⁾。

IV Statement (1884年5月)

ベリーは、米国内での支援者の理解のため日本でのキリスト教主義の医学校設立計画の意義・必要な基金額も記載したStatementを起草した。A4版本文8頁、ベリーの注1頁、賛同文8頁で構成されている。Statementを起草することになった経緯、必要な基金額の試算内容、キリスト教主義に基づく医学校等が日本で今必要な理由とその説明、看護師養成学校が必要な理由とその説明という本文構成になっている。

医学校が必要な理由は以下の7項目で説明している⁴¹⁾(図3)。

- 1) 日本での西洋医学の採用と教育者である外国人医師団への期待

- 2) 倫理的雰囲気の影響下で医学を学ぶことができる医学校の欠如
- 3) プロテスタント各派の多数意見としてキリスト教主義に基づく医学校設立への切実な要望
- 4) 日本における西洋医学の発展への要求
- 5) 多くの人の賛同を得ることができる必要な事業
- 6) 提案された医学校の創設は、キリスト教のもとで高等教育を発展したいという多くのミッションスクールを作った創設者達の思いとも重なる動きであること
- 7) 医学校の設立が伝道事業への支援にもなること

ベリーや新島襄にとって一番主張したい点が2)と4)であらわれている。

- 2) 倫理的雰囲気の影響下で医学を学ぶことができる医学校の欠如について
「ドイツの無神論は、東京大学の医学生に絶大な影響を与えた。東大で教育を受けた者や東大卒業生が赴任する各県の医学校を通じて、その物質主義が日本全土で大きな力を占めようとしている。実際のところ、偶像崇拝や近代懐疑主義や無神論などの強い影響をうけることなく医学の勉強ができる機関が今はどこにもない。」⁴²⁾
- 4) 日本における西洋医学の発展への要求について

「これまではドイツの影響が日本の医学教育に浸透しており、現在ドイツ流の教育を受けた日本人医師が続いている。ドイツ医学の素晴らしさは、日本人学生に強烈な印象を与えており、若い人々は、西洋医学はドイツ医学の文献（日本において医学表現の最も信頼の置ける方法はドイツ語である）と考えている節がある。英米の先進医学を見せることや医学生に真の科学というものは、極端に一国に偏ったり特定の民族に属したりするものではなく、世界中のすべての人に共通であると

STATEMENT

SHOWING THE URGENT NECESSITY OF ESTABLISHING A

Christian Medical School, Hospital, and Training School for Nurses in Japan.

ON the 3d of May, 1883, the members of a company of Japanese gentlemen, known as the *Dōshisha*, with Reverend Joseph H. Neesima at its head, and formed, in accordance with the requirements of Japanese law, for the promotion of higher education in Japan, met at Kiyoto, and, after conference with the pastors and delegates of fourteen of the churches of Central Japan who had convened for the purpose, addressed a memorial to me and through me to the Christian philanthropists of Great Britain and America, asking for co-operation in the establishment of a Christian Medical School and Training School for Nurses in Japan.

The proposition of the memorialists was to the effect that, if an endowment fund for the support of the necessary professors, and for the purchase of needed apparatus, could be furnished by friends abroad, they, on their part, would guarantee to provide as rapidly as in their power all the necessary real estate and buildings required for dormitories, lecture rooms, and hospital.

On receiving this memorial, and adding my reasons for favoring its proposals, it was sent out to all the missionary bodies laboring in Japan for their consideration. Replies

図3 Statementの冒頭

いうことを印象づける学校になれば、日本の医学の真の発展に有効であることが示せるであらう。」⁴³⁾

「この考えは以前より明治政府の有力者は認識しており、英国の組織の元で大阪に医学校が開校されたことがあった⁴⁴⁾。しかしながら1876年の国内の反乱により国家の財政が不安定化したためその医学校が廃止となった。あえて申し述べれば医学を英語で履修することを期待した多くの学生にとっても大変残念なことであった。」

時に交付する甲種医学校と認定する基準は、少なくとも3名以上の東京大学において医学士の学位を得たるものが常勤で教育にかかわり、臨床的な教育ができる病院があることが最低限の条件であった⁴⁵⁾。

ベリーは国際的な実力を持つ医学校にするためには、少なくとも4名の外国人教師と3名の日本人教師が必要と考えており、またその教授の質も保証されていなければならないと考えていた。

Statementの中では以下のような日本人スタッフを考えていた。

当時明治政府が国内法に基づき医師免許を卒業

「幸いにも私達は数年前にジェファーソン医

科大学を優秀な成績で卒業した青年を知っており、彼は今回の事業に参加する準備ができており、有能である⁴⁶⁾。もう1人は今回の動きに大変共感を持っておりアメリカに来てペンシルバニア大学医学部入学予定である⁴⁷⁾。3人目の医師は日本で見つける、もし今はみつからなくても必ず現れてくると期待している。」

ベリーのStatementでの試算では、外国人教師1名永続的に雇用する場合1人当たり45000ドルが必要とされており、目標として4万ドル近い基金創設が必要と考えられた。

V その後の経過

フィラデルフィアでの集会（1884年5月22日、6月12日）

米国医学雑誌でのベリー医師のインタビュー記事では、日本での医学校設立計画は、コンスタンチノーブルのロバート大学やバイルートのシリア・プロテスタント大学と同様の計画であると述べている⁴⁸⁾。

5月22日にフィラデルフィアの有志でベリーよりStatementをもとに話を聞く会が開催され一同大いに興味をもった。その後賛同者を募り、またステファン司教⁴⁹⁾、ウィリアム・ペッパー⁵⁰⁾、アグニュー医師⁵¹⁾、キーン医師⁵²⁾ら宗教界や医学界の重鎮が一同に会し6月12日にベリーの事業について再検討した。この事業は、プロテスタント各派の垣根を越えるものであり皆一同で資金集めや医師提供に対して応援すべきという声が多く寄せられ、決議文が採択された。またウィリアム大学のマーク・ホブキンス⁵³⁾からも連合案での日本での医学校設立に関する試案がだされた。

早急に設立準備委員会を立ち上げ、ニューヨーク等の他都市にも同様の委員会をつくり連携を図るべきであるということが決定された。この会合の記事は、“The Philadelphia inquirer”, “The New York Times”にも掲載され、またアメリカン・ボード機関誌“Missionary Herald”にも掲載された⁵⁴⁻⁵⁶⁾ (図4)。長老派教会、オランダ改革派教会、メソジスト監督教会の各派が賛意をしめして事業を推

進させていると述べられている。

フィリップ・ブルックス師の提案で超教派による連合医学校案への変更決まる（1884年10月27日）

6月以後米国伝道協会の後押しもあり、ポートランド、ボストン、ニューヨーク、シカゴ、セントルイス、フィラデルフィアで同様の集会が行われた。“Missionary Herald”でも述べられていた「教派の違いをこえた」協力体制をくむことが必要との認識がアメリカでは強くなっていた。

10月27日のボストンでの会合で、議長をつとめた米国聖公会のフィリップ・ブルックス師⁵⁷⁾より、プロテスタント全体の超教派体制で費用も超教派で分担し協力することが望ましいという提言がなされ、アメリカン・ボードの事業ではなくプロテスタント各派全体で取りくむという連合医学校構想が提案された。ベリーや関係者一同にとっては唐突な提案であったが、議論を重ねるうちに連合医学校にも多くの利点があることが強調された。

超教派の連合医学校で運営する理由・利点としては

- 1 医学校設立そのものが宣教活動であること
- 2 全会一致の行動であることを表明することが大切であること
- 3 基金集めが迅速に行うことができること
- 4 その結果設立を早めることができること
- 5 すべての宣教師が興味を持つ事案であること

以上の5つの理由がStatementに付け加えられた。

アメリカン・ボード主体の京都での設立とは形を変え、連合案での案に変更された。11月1日YMCAの会議がボストンでひらかれ、医学校設立の基金は個人的篤志にたよるばかりではなくフィラデルフィアで組織されたような地域委員会の早急な設立が決議された。

日本宣教師団への照会（1884年12月16日）

ベリーが当初考えていた京都でのキリスト教主

A PROPOSED CHRISTIAN MEDICAL COLLEGE FOR JAPAN.

THE new Christian life in Japan calls for educational institutions favorable to that life. Several Japanese gentlemen, deeply impressed with the need of a medical school, in which the influences shall favor the moral and religious development of the students, have asked the co-operation of Christian philanthropists in America and Great Britain in the establishment of such a medical school for their country. It is lamentably true that, at the present time, an atmosphere of scepticism and materialism pervades the professional institutions of Japan, and the Christian community are unwilling that the physicians, who are to enter their homes, should be trained under such influences. They propose, therefore, to secure grounds and erect buildings, probably at Kioto, and ask aid from friends abroad in the endowment of professorships. The movement is specially promising, inasmuch as it is entirely indigenous, the people on the ground taking the initiative. Dr. J. C. Berry, well known as the medical missionary of our Board at Okayama, compelled for reasons of health to visit the United States, was asked by the representatives of the churches in Japan to present the matter of this Christian medical school to friends in the United States. It is proposed to make the institution undenominational, but thoroughly Christian. Missionaries in Japan, connected with the principal organizations laboring there, have heartily endorsed the enterprise. Secretary Ellinwood, of the Presbyterian Board, Secretary Cobb, of the Reformed Church Board, and Bishop Wiley, who has charge of the missions of the Methodist Episcopal Church in Japan, warmly favor the scheme. The Prudential Committee of the American Board have also expressed their deep interest in the project. It is of course impossible to divert to any other purpose funds given specifically for evangelistic work; but this object is earnestly commended to all Christian philanthropists, and especially to medical and scientific men, who desire to have the sciences in which they are interested taught under conditions favorable to the development of moral and religious character. Dr. Berry, during the brief time he has been in this country, has received much encouragement, and his success in securing the asked-for endowment would prove of incalculable blessing to Japan.

図4 Missionary Herald 1884年7月号 p.267

義に基づく医学校設立の計画は、教派の違いを超えた協力体制が望ましいと判断され、場所も不確定でプロテスタント超教派で取り組む連合医学校構想に変更になった。その連合医学校と同志社の自治権に関する懸念への質疑応答とこれまでの経過を説明した文書を、日本のプロテスタント宣教師団各派に送り連合医学校構想の是非を再度たずねることとなった。

ベリーは、アメリカン・ボードを中心とした案が形を変えて超教派体制に変わったこと、超教派による連合医学校構想にアメリカ内のプロテスタント派の3派が賛成していること、2派が財政的な理由で支援は無理と回答してきたこと、1派は検討中とのことであることを説明している。

アメリカ国内で賛成していても、日本国内各派からの協力体制がないと不幸なことになることから意見を求められているが、自分自身からぜひ協

力をとほいいにくいとベリーは述べている。また、フィラデルフィアとシカゴでの会合が終わった時点で第二の案として、現在のアメリカの不況の現状から基金創設自体を取りやめるという案もでたこともあって、現在のような案になったと補足している⁵⁸⁾。

新島襄への手紙 (1885年1月12日)

1885年1月クラーク師と新島襄がボストン近郊の保養地で静養中に、新島襄あての手紙の中でベリーが進捗状況について述べている。

「現在ボストンに指導者のクラーク師が不在のため、何も決められない状況である。3回会議を開いているが前進には至っていない。もしアメリカン・ボードの日本宣教師団と教会が現在案(連合校構想)に同意すれば、我々側もまとまり、費用の分配負担に応じるであろう。今の問題は同志

社とアメリカン・ボードの問題となっている。あなたと彼らがやろうと決めればあとは一気に走り出す状況ではあるが、もし決定が違った場合には、すべての事業は諦めることになろう。」と書いている⁵⁹⁾。その後続けて「現在の案は、当初同志社より提案された案よりも利にかなっていると考えている。なぜならば連合体でまとまることができれば、この計画は日本国内のすべての教会や宣教師にとって等しく関心を持つ事案になり、その点では異論のないところであろう。もしアメリカン・ボードの単独事業となった時には、どうしても宗派色がでてきて東京やその他日本国内にいる多くの人々が連合案に比べて参加しにくいであろう。財政的にも、最初の単独事業案よりも事業は容易におこなえと考える。困難と思える点は、宗派の違いを超えた協力体制を作ることにあるだろう。個人的には問題ないと考えているが、アメリカン・ボードの日本宣教師団が心から同意してくれれば、連合案は日本国内のプロテスタント各派の団結を強めるような方向に働いてくれるであろう。あなたが日本の同士にこの件に関するあなた自身の考えを述べてもらったほうがよいかもかもしれない。ボストンにもどったらじっくりと話し合いたい。(略)クラーク師がもどってくれば事態が進展すると考えている。クラーク師は、連合案に最初に賛意を寄せた人である。」と日本からの同意の返事を心待ちにしている心境がつつられている。

ヘボンの長老派教会本部への手紙(1884年12月と1885年2月)

“Missionary Herald”での記事をうけて1884年9月13日バラ師の長老派本部あての手紙では各派の思惑の違いとベリーの連合構想への懸念が記されている⁶⁰⁾。長老派本部は連合医学校構想に乗り気であったが、日本の長老派宣教師たちは当初よりアメリカン・ボード内での事案であるとの認識がなされていた。各派からの賛同表明もアメリカン・ボードの事業という在日宣教師の一般的な認識であった⁶¹⁾。教派の違いを超えた協力体制をとらえて神戸在住の宣教師ハースト師は、本部に

かなり強い口調の文面での反対意見表明をおこなっている⁶²⁾。

ヘボンは1884年12月の手紙で、ベリーの医学校設立が新しい方向(連合医学校構想)に向かっていることを理解したうえで、京都での設置に疑問を唱え外国伝道協会の伝道のためのお金を無駄なことに出費しないことを要望している⁶³⁾。

また1885年2月の手紙では、医学校設立は、正当な伝道の仕事とはいえないこと、連合で運営していくことは、同志社の名前の下に協力するのであれば円滑な運営が難しいとのべている。その一方で基督教の影響下での英語によって授業される医学校の必要性は十分あるとしており、今でもベリーの原案の形が望ましいと考えているとヘボンは記している⁶⁴⁾。

VI 連合医学校構想の断念とその後

連合医学校案の断念(1885年3月)とクラーク師からの手紙(1885年3月30日)

3月25日アメリカン・ボードの日本宣教師団よりアメリカン・ボード本部に電報が届き、連合医学校構想に対して同意できないと知らせてきた。またベリーには京都に来て、京都の学校(同志社英学校)を手伝ってほしいという希望が寄せられた⁶⁵⁾。

ベリーはこの決定を知らされたあと、クラーク師に3月27日送った手紙の中では、長老派のエリンウッド師が2週間前の会話の中で、「長老派は、同志社の名のもとに京都もしくは大阪にできても また他派の影響下のもとに大阪できても、枠組みが決まらないまま大阪でという形になってもわが派に負担すべきお金は用意する。」と話してくれていたことを記載している。それに較べてアメリカン・ボードの活発と言えなかった今回の取り組みに対して落胆した気持ちをのべている⁶⁶⁾。

新島襄への手紙(1885年4月11日)

アメリカン・ボード日本宣教師団から、連合医学校構想に反対との意見が送られてきたことで、Statementを作成して展開したアメリカでの約1

年間にわたるベリーの医学校設立運動は断念された。1884年秋より新島襄もアメリカ国内に渡り、共に運動協力していた。断念通知を受けて間もない4月11日新島襄にあてたベリーの手紙では、無念の気持ちが伝わってくる。

「医学校断念の通知が私に届いたときの落胆は話すまでもないが、日本宣教師団の同志達は、参加することになる日本の各派が躊躇していたことに影響されたことは疑いようがない。アメリカン・ボードの同志達は、あなたと共に可能な限り京都の学校（同志社英学校）を手伝ってほしいと希望してきている。キリスト教信者やキリスト教に関心を持つ人達のために日本で医学校を作ろうとするあなたの構想が正しい動きであったことは、近い将来皆が知るようになるであろう。」⁶⁷⁾

医学校設立運動のその後について

超教派による連合医学校構想は断念され、1885年日本に戻ったベリーは、京都で看病婦学校や同志社病院の土地取得、開校にむけての仕事が主となっていった。その後京都でアメリカン・ボードの単独事業として同志社病院ならびに京都看病婦学校が1886年に開設された。ベリーは同志社病院院長を勤め、新島襄は京都看病婦学校の校長を勤めた。このとき京都看病婦学校に派遣された教官は、ナイチンゲールから薫陶を受けたアメリカ初の有資格看護師リンダ・リチャーズであり、ベリー医師とともに日本における看護業務の事業が展開され日本看護史上は特記すべき出来事であった⁴⁾。

その後1886年5月、英国の豪商モートン氏⁶⁸⁾が、日本でのキリスト教主義に基づく英米医学を範とした医学校設立構想に対して10万ドルの基金の申し出をおこなった。同志社側が土地と建物を用意して、基金の運用利益でエジンバラ医療伝道会より外国人教授を派遣するという申し出であった。モートン氏は1887年より3年間にわたり2名の宣教師と2名の医療宣教師を中国に派遣する事業にも全額出費している。

ベリーは、エジンバラ医療伝道会とシカゴ医療伝道会合同でアメリカン・ボードとの協力のもと

での医学校設立構想を考え、新島襄も海外資産の寄付行為に関する法律の整備について京都府の北垣知事や文部省の森有礼大臣に交渉を続けた。

新島襄は、同志社大学構想や仙台の東華学校設立、教会合同運動等大きな事業や懸念をたくさん抱え、1887年ごろよりもと不安のあった健康状態が悪化していった。モートン氏よりも、まずは新島襄自身の最大懸案事項になっている大学設立に専念されてはという提案がだされ、この件も最終的には立ち消えになった。1890年に新島襄が病死しアメリカン・ボードと同志社の良好な関係も徐々に冷え込んでいった。同年の教育勅語発布を機とした国粋反動勢力の台頭もあり、病院経営には日本人院長が必要との声が同志社病院内で高まっていった。1893年ベリーが海外研修で不在の間に、帰国後院長には日本人がなりベリーは顧問となることが決定された。この結果を不服としたベリー自身が日本を離れることになり、以後日本でのキリスト教主義の医学校は長い間実現しなかった⁶⁹⁾。

日本では各派連合によるキリスト教主義の医学校設立は断念されたが、後年中国では実現している。1906年トーマス・コ克蘭らによって、アメリカン・ボードと長老派とロンドン伝道会の協力の下、北京協和医学校（Peking Union Medical College）が設立された。この医学校は後年ロックフェラー財団の基金で病院開設をおこなっており、今もなお中国における重要な医療拠点の一つとして活動している。

Ⅶ 考 察

ベリーと新島襄は、1870-1880年代の日本の医学の状況をみたとき、大学東校（東京医学校、東京大学）を頂点とするドイツ医師による医学教育の優秀性は認めているが、ドイツ医学はあまりにも学理追求型であり基礎医学、基礎研究重視と見ていた。一方、英米医学は、教育および臨床にも重きを置き、病人の治療も重視し看護師の役割を重視していた。

クリスチャンの医師からも、ドイツ人教師によるドイツ医学の教授は物質主義的で無神論に傾き

すぎているものと映った。キリスト教関係者は国内で学ぶドイツ医学には宗教的な面や倫理的な面への配慮に欠けており、また医学生に対して患者に接する教育も不足していると考えており、看護師の国内での育成も急務と考えていた。

真の科学というものは、ドイツという一国に偏ったり特定の民族に属したりするものではなく、世界中のすべての人に共通であるという信念から英米医学も日本で必要と考えた。ベリーは今が医療教育の黄金期であると考え日本でキリスト教主義の医学校設立をめざした。

1869年東京医学校に最初着任したウイリス医師⁷⁰⁾は英国医学を用いていたが、政府のドイツ医学採用およびドイツ医師の東京医学校着任によって鹿児島県に赴任した。鹿児島でウイリス医師より教育を受けた高木兼寛⁷¹⁾は英国留学後、1881年に臨床第一の英国医学と患者本位の医療を広めるため成医会を立ち上げた。ベリーは成医会のメンバーでもあり成医会雑誌に記事も載せている⁷²⁾。また新島襄は、1887年3月9日に高木兼寛を訪問している（不在にて会えず⁷³⁾。高木兼寛のめざした医学教育は新島襄らが理想とした医療に近かった。高木兼寛は医療における看護の重要性を認識し、1885年日本初の看護学校である有志共立東京病院看護婦教育所を設立し米国宣教師リードらによる看護教育が開始された。その翌年には新島襄やベリーの尽力で京都に日本2校目の看護師養成学校である京都看病婦学校が開設されている。共にキリスト教精神に支えられた学校であり、「東の慈恵、西の同志社」とうたわれた。

日本の性急な西欧化には、宣教師だけが危惧していたわけではなく東京大学の医学教授を長年務めたドイツ人ベルツ教授よりも同様の趣旨の警告が在職25年祝典の席でなされている。「日本では今日の科学の『成果』のみをかかれら（外国人教師）から受け取ろうとしたのであります。この最新の成果をかかれらから引継ぐだけで満足し、この成果をもたらした精神を学ぼうとしないのです。」⁷⁴⁾

ベルツのこの発言は1901年のことであるが、日本人は手早く西洋文明の実利のみをほしがりの根底に流れる思想までは知りたがらない点に、

日本人の特質があると多くの外国人の目には映っていた。この指摘は現代においても通用し、現代社会はより早く結果が求められるようになり結果重視の傾向が強まってきている。明治時代にキリスト教精神と共に西洋医学を教育する医学校設立の計画があったことやプロテスタント全体で超教派による日本での医学校設立運動があったことの経緯を明らかにすることは、日本医学教育史の観点からみても大切なことでありStatementの内容とあわせ報告した。

おわりに

西洋医学の普及はキリスト教精神と共に浸透していく必要があると考え、医学教育が十分ではないと考えた医療宣教師ベリーは、Statementを用意しキリスト教主義に基づく英米医学を範とする医学校設立運動を展開した。総論部分では日本のプロテスタント各派から賛同が得られており、キリスト教主義に基づく医学教育並びに医師養成が、伝道をより広めるうえでも1880年代の日本にとっても有用であろうという共通認識が在日プロテスタント各派にあった。またドイツ医学のみに偏った日本の医学教育への懸念が新島襄やベリーにはあり、米国内を中心に展開された設立運動は途中から壮大な連合医学校構想が考えだされものの、アメリカン・ボード本部の消極的対応とアメリカン・ボード日本宣教師団の反対により実現には至らなかった。

注と参考文献

- 1) 青柳精一 近代医療のあけぼの 幕末・明治の医事制度 京都：思文閣出版；2011. p.267
- 2) 京都府医師会編。京都の医学史。同志社病院と京都看病婦学校 京都：思文閣出版；1980. p.874-888
- 3) 同志社社史資料編纂所編。同志社百年史（通史編1）京都看病婦学校と同志社病院 京都：同志社；1979. p.288-294
- 4) 小野尚香。医療宣教師ベリーの使命と京都看病婦学校『アメリカン・ボード宣教師：神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869～1890年』同志社大学人文科学研究所；2004. p.272-297
- 5) Statement showing the urgent necessity of establishing a Christian Medical School, Hospital, and Training School

for Nurses in Japan and Commendatory letters. Philadelphia, May 19th, 1884 American Board of Commissioners for Foreign Missions. Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions Real 335 No. 249 (同志社大学今出川図書館)

- 6) アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions)

1810年アメリカで外国伝道を目指す人によって結成された超教派の海外伝道団体。派遣先では伝道に励み自主的な教会形成を目的とし、教会結成後は現地の主体性を尊重し、宣教師は協力者という立場を原則とした。日本への派遣は、1868年米国にいた新島襄がアメリカン・ボードの海外伝道主事クラーク師に日本伝道の必要性を訴えたことを契機として1869年よりD.C. グリーンの来日より始まった。

- 7) 大久保利武. 日本に於けるペリー翁 東京保護会; 1929. p. 109
- 8) Katherine Fiske Berry. A Pioneer Doctor of Old Japan: The Story of John C. Berry New York; London: Fleming H. Revell company, 1940
- 9) イザベラ・バード. イザベラ・バードの日本紀行(下). 時岡敬子訳. 東京: 講談社; 2008. p. 270
- 10) 長門谷洋治. 近代日本における外人宣教師の研究. 日本医史学雑誌 1970; 16(1): 1-44
- 11) 井上勝也. 宣教師 John Cutting Berry 『アメリカの宣教師の活動とその背景』北垣宗治, 井上勝也編 同志社大学アメリカ研究所; 1982. p. 1-31
- 12) John C. Berry 書簡集: 1871-1896 / 長門谷洋治, 坂本鈴子 京都: 同志社大学人文科学研究所; 1966
- 13) 亀山美智子. 京都看病婦学校と新島襄—J.C. ベリーの書簡を中心に—『新島襄—近代日本の先覚者』京都: 晃洋書房; 1993. p. 129-143
- 14) 小野尚香. 京都看病婦学校開設前夜の医学校設立構想—来日医療宣教師ペリー J.C. Berry 宛てアメリカン・ボード幹事クラーク N.G. Clark の書簡 1884年5月~1885年12月から読む— 医譚 2006; 101: 31-45
- 15) 田中智子. 地域医学教育態勢と新島襄の医学校設立構想 キリスト教社会問題研究 2008; 57: 61-91
- 16) Proceeding of the general conference of the protestant missionaries of JAPAN. Osaka Japan April 1883 p. 324

議事録にみられるペリーの発言は以下の通りである。

“Now is the golden age of medical education in Japan. The popularity of western medical science among the people is leading thousands of young men to devote themselves to its study. While the call of Christian parents all over the land is loud for Christian medical college where their sons can be educated without being imbued with German skepticism. It is to be hoped that the early future may witness some well directed effort in this direction.”

- 17) 新島襄 (Joseph Hardy Neesima 1843-1890) 同志社

の創設者、江戸の安中藩藩邸にて出生する。父は安中藩士の祐筆職であった。1860年幕府の軍艦操練所に入る。1864年函館より脱国アメリカに密航、ボストンの資産家にしてプロテスタントのハーディ夫妻に気に入られ養子となる。アーモスト大学、アンドーバー神学校で理学・神学を学ぶ。1866年ボストンにて洗礼を受ける。1872年に岩倉使節団に随行して欧米の教育制度を視察。1874年に北米の海外伝道団体アメリカン・ボードの准宣教師として帰国、キリスト教の伝道を進め、翌年11月京都に同志社英学校を設立した。キリスト教主義にもとづく自由教育を唱えた。私学の大学設立運動のさなか病に倒れ1890年死亡した。

- 18) 新島襄全集 5巻 京都: 同朋舎; 1984. p. 21-22 (現代語訳 現代語で読む新島襄 東京: 丸善: 2000. p. 41-42)

「日本の医者が(10人中8, 9人まで)病人の貧富を見分けて薬を差別するのと違い、(ロシアの医師は)物乞いのような貧しいものにも病氣しだいで高価な薬を与える。その思いは病氣が全快し、患者がロシア人を慕うのを望んでいるだけである。」「日本の政府が建てた病院はロシアの病院とは相反し、食事は良くなく(卑しい役人がこれによって金を得る)、病人が必要とする薬も良くない(医者がこれによって金を得る)。それはさておき、薬を調合し、病氣を診察する肝心の医師は竹林より来る藪医者なので病院の中には人がいない(掃除は行き届かず、衣類は時々しか替えない。施しをしようという考えなどどこにもない)。これに反してロシアの病院には病人が充満し、外来の病人はおおよそ5, 60人ほどである。箱館の人が長年ロシアの恵みと救いを受ければ、日本の政府にそむき、心からロシア人を尊敬するようになるだろう、と大変嘆かわしく思う。」

- 19) Letter to Dr. John C. Berry 1883.5.5 新島襄全集 6巻 京都: 同朋舎; 1985. p. 215-218
- 20) 新島襄ら同志社関係者のドイツ医学と英米医学との比較、考え方がよくでている点であるため、長くなるが引用する。現代語で読む新島襄 東京: 丸善: 2000. p. 158-159

「この国ではもうすでに実に多くの医学校が設立されて、中央と地方の政府によって十分に運営されており、それゆえ私立団体がさらに医学校を設立するのは無益だ、とわれわれの計画に反対して言う人がいるかもしれない。しかし、そのような反対をする人は、それらの医学校にキリスト教的心情や影響力が少しでもあるかどうか調べて見てもらいたい。我々が知る限り、これらの医学校の目的は純粋に学問的、専門的であって、彼らは宗教や道徳に全く関心を払っていない。これらの学校の外国人(ドイツ人)教師たちの意見は一般的に反キリスト教である、と我々は信じている。

これらの既存の医学校では完全にドイツ語とドイツの制度が用いられている。ドイツ人がこの特定の職業において高い評価を受けている事は認めるが、ドイツの制度に限定しすぎると我々の視野は狭く、自己中心的になる恐れがある。それゆえ我々は、教育の現場では英語を大幅に使用し、入学許可にあたっては学生にも十分な英語の能力を有することを要求する。英語使用の主な利点は、英米において発行された医学論文に広く接することができるという点である。

政府所管の医学校では学生が患者に接する訓練が非常に少ないと聞いている。我々の願いは医学校に付属する病院を設け、学生たちが卒業する前に十分な訓練の機会をあたえられるようにすることである。また、優秀な看護婦を育てるための看護学校も併設したいと望んでいる。ほかの医学校にはそのような施設が全くないので、医学校の医療活動に対して非常に大きな付加価値を与え、価値を高めるものとなるだろう。」

- 21) “Reasons favoring the establishment of a Christian Medical School and Training School for nurses in Japan” June 28, 1883 American Board of Commissioners for Foreign Missions. Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions Real 335 No. 247 (同志社大学今出川図書館)

Statement よりも先に日本国内プロテスタント各派にアメリカン・ボード日本宣教師団より送られたもので J.D. Davis, John T. Gulick, Otis Cary, Jr, John C. Berry の4名の連名で出されている。この中では8つの項目に分けて医学校が必要な理由を挙げている。

- 1) Absence of any provision by which a student can acquire a medical training under wholesome moral influences
- 2) The applications of Western Medical Science and the wide-spread demand educated physician
- 3) The demand a Christian medical school is widespread and urgent among the protestant-communities of the land
- 4) It is a native enterprise and will receive the hearty support of the people
- 5) The establishment of the proposed department will be in harmony with the design of the founders of the training school at Kyoto Vis to meet the demand off high educations in Central and Southern Japan
- 6) Its influence is widening and developing Medical Science in Japan
- 7) The materialism in the Government Schools and among the Physician of the Country
- 8) The Aid resulting to Christian work

- 22) ジェームス・カーティス・ヘボン (James Curtis Hepburn 1815-1911) アメリカ長老派教会の宣教師

プリンストン大学、ペンシルバニア大学卒の医師 米国長老派教会より1859年より1893年まで日本に派遣されていた。マカオ、中国で医療伝道の経験がある。日本での業績は数多いがヘボン式ローマ字の創始者としても有名である。日本における医療伝道のパイオニアである。

- 23) ジェームス・ハミルトン・バラ (James Hamilton Ballagh 1832-1920) オランダ改革派教会の宣教師 ラトガーズ大学、ニュー・ブランズウィック神学校を卒業 1861年オランダ改革派教会より横浜に赴任した。日本で最初にできた横浜海岸教会の牧師 多くの日本人を回心に導いた。横浜バンドの基礎をになった人物である。
- 24) デビットソン・マクドナルド (Davidson McDonald 1836-1905) カナダ メソジスト派の宣教師 カナダ生まれ。カナダで伝道・牧会の傍らトロント大学で医学を学ぶ。1873年来日し1874年静岡の賤機舎に教師として赴任した。静岡バンドの基礎を築く。1876年県立静岡病院の医師に招かれる。1879年再来日し東京・築地明石町に住み、築地教会(銀座教会)担当の傍ら診療所を開設。伝道と医療に大きな足跡を残した。1904年帰国した。
- 25) ヘンリー・スタウト (Henry Stout 1838-1912) オランダ改革派教会の宣教師 ラトガーズ大学卒業 1869年来日し長崎に赴任した。1903年までフルベッキのあと長崎で宣教師を勤めた。長崎教会の設立し1882年東山学院神学部を創設した。
- 26) ネイサン・ブラウン (Neisan Brown 1807-1886) アメリカの宣教師 聖書翻訳で有名な言語学者 1827年ブラウン大学卒 ビルマ、インドで伝道 アッサム語訳新約聖書出版した。1873年日本宣教師として来日 横浜第一バプテスト教会を設立した。1880年に日本で最初の全訳新約聖書『志無也久世無志興』を出版した。
- 27) チャールズ・ウォーレン (Charles Frederick Warren 1841-1899) 英国聖公会宣教師 香港での布教経験あり1873年来日した。1884年桃山学院の前身である三一小学校を開設した。
- 28) ヘンリー・ランニング (Henry Lanning 1843-1917) アメリカ聖公会の医療宣教師 ニューヨーク州出身。オールバニー医学校卒 1873年来日した。大阪に施薬院と英和学舎をひらく。1883年聖バルナバ病院を創立、初代院長をつとめ、1915年帰国した。
- 29) ヤコブ・ハツラー (Jacob Hartzler 1833-1916) アメリカの宣教師 1880年来日し旧約聖書の日本語訳に取り組んだ。のちに米国福音教会に移動し1894年長老へ就任した。
- 30) ヘンリー・ルーミス (Henry Loomis 1839-1920) アメリカ長老派教会宣教師 1872年来日し横浜第一長老公会の初代牧師を務める。讃美歌の翻訳、海員伝道会の仕事に携わった。

31) Statement: p. 14–15

“(From J.C. Hepburn, M.D, LL. D, Presbyterian Mission)
YOKOHAMA, June 13th, 1883.

DEAR Dr. Berry: - (略) *Saikyo (Kyoto) appears to me to be, on many accounts, the best place for such a school, and you are fortunate in having a company of native gentlemen already organized who have such a measure at heart and who will recommend it to their countrymen. I have no doubt of its success under a competent medical faculty. I am, my dear sir, Sincerely yours,

J.C. HEPBURN”

32) Statement: p. 15

“(From Reverend James H. Ballagh, Reformed (Dutch)
Church Mission.)
YOKOHAMA, June 14th, 1883.

J.C. Berry, M.D,

VERY DEAR BROTHER: - I am in receipt of your letter of the 19th ult, enclosing reasons for the establishment of a medical department and a school for training nurses in connection with the Doshisha school at Kioto. That there is great need for a school for medical training under Christian auspices is very apparent from the reasons assigned by your circular and which are patent to all who reside in Japan. Particularly desirable and favorable I conceive it to be that this medical school is to be situated in Kioto, where it will not come so immediately into competition with the Gov't Medical College in Tokio, and where a large field is to be provided for. (略)

With sentiments of the greatest regard, I am yours truly,
JAS. H. BALLAGH.”

33) Statement: p. 16–17

“(From Dr. D. McDonald, Canadian Wesleyan Union)
5 Tsukiji TOKIYO, June 18th, 1884

DEAR DR BERRY: - (略) I believe that there are many young men in Japan who would be very glad to become acquainted with medical science through the medium of English language. There is no doubt that a Christian medical School would be a powerful aid in the moral elevation and evangelization of this empire. The institution should be first class. Its graduates should be as well trained and furnished as the graduates of the Government School. (略)

With best regards Sincerely yours, D. McDONALD.”

34) ナセニアル・ジョージ・クラーク (Nathaniel George Clark 1825–1896) アンダーヴァー神学校, オーバン神学校に学ぶ。アメリカン・ボード海外伝道局総幹事を長年にわたってつとめる。アメリカン・ボードが日本伝道を開始する契機は、アーモスト大学留学中の新島襄がクラークに直訴したことに始まる。

35) NG. Clark letter to Dr. Berry 1884.5.9 Statement: p. 13

36) フランシス・フレイド・エリンウッド (Francis Fleid Ellingwood 1828–1908) オーバン神学校に学び

プリンストン大学卒 長老派教会海外伝道部担当執事を1871年より長年にわたり務めた。1884年に横浜、神戸、長崎等を訪問している。

37) ヘンリー・コップ (Henry N. Cobb 1834–1910) オランダ改革派教会海外伝道部執事 エール大学卒 アメリカン・ボードよりペルシャに2年間派遣されたことあり、1877年よりフェリス (J.M. Ferris) のあとをうけ海外伝道担当執事を務めた。

38) アイザック・ウイリアム・ワイラー (Isaac William Wiley 1825–1884) メソジスト派宣教師 医師 1850–1854年まで中国福州にて医療伝道をおこなう。1872年メソジスト監督教会の監督に選出される1877年日本に立ち寄る。1884年日本、中国への旅行中に福州にて死亡した。

39) F.F. Ellinwood letter to Dr. Berry 1884.5.12 Statement: p. 14

40) I.W. Wiley letter to Dr. Berry 1884.5.22 Statement: p. 15

41) 7項目の英文は以下のとおりである。

- 1) The appreciation of western medical science and the widespread demand for educated physicians
- 2) The absence of any provision by which a student can acquire a medical training under wholesome moral influences
- 3) The demand, therefore, for a medical school under Christian auspices is widespread and urgent among the protestant communities
- 4) Its need for the development of medical science in Japan
- 5) It is a native enterprise, and will receive the hearty support of the people
- 6) The establishment of the proposed medical school will be in harmony with the design of the founders of the numerous mission schools throughout the land, viz., the promotion of higher education under Christian auspices.
- 7) The aid resulting to Christian work

42) The Absence of any provision by which a student can acquire a medical training under wholesome moral influences

“German skepticism has found fertile soil among medical students at the Tokiyo University, and the strong tide of materialism now sweeping over the land gains new force from men who have been educated there and at the provincial schools. In fact, nowhere in Japan is there provision for the medical training of young men without their becoming imbued with a strange mixture of heathenism, modern skepticism and infidelity.”

43) Its need for the development of medical science in Japan
“Heretofore German influence has prevailed in medical education, and at present it is largely in the hands of Japanese who have been thus educated. The exclusive views of

- the German teacher have become intensified in the Japanese pupil, so that these young men seem to regard the realm of medical science as bound up in German medical literature- they themselves being the only reliable medium for its expression in Japan. The influence of a school representing the advanced medical science of England and America, and impressing upon its pupils the true and liberal idea that science belongs exclusively to no country or race, but has the entire world for her domain, would be potent in developing and liberalizing the medical education of the land.”
- 44) 浪速施療院 1876年松村矩明, 高木玄真両医師とアメリカン・ボード医療宣教師アダムスによって開設した診療所。医療を通じて伝道をおこなった。
- 45) 「医学校通則」1881年(明治十五年)五月二十七日「甲種医学校ノ教員中, 少ナクトモ三名ハ東京大学ニ於イテ医学士ノ学位ヲ得タル者ヲ以テ之ニ充テ, 主トシテ重要ノ学科ヲ分担セシムベシ。但, 他ニ相応ノ学力ヲ有スル者アルトキハ文部卿ノ認可ヲ経テ本文医学士ニ代フルコトヲ得。」アメリカで医師免許を有している“Doctor”は、本文中の「他ニ相応ノ学力ヲ有スル者」であるというのがベリーの考えであり、政府も同じ見解であった。
- 46) 小野俊二 医師 岐阜県生まれ1874年神戸公会創設メンバー 同年受洗 1877年ベリーと共に渡米 フィラデルフィア大学医学部卒 奈良病院院長をつとめた。小野の名前は、ベリーからの新島襄宛の手紙(1882年1月18日 新島遺品庫目録番号2410)に参加希望の医師として名前が出ている。その他同様の記載が新島襄の日記に出ている。(新島襄全集5巻 p.192, 193)
- 47) 川本恂蔵(1866-1918) 兵庫県三田生まれ 父は三田藩医川本泰年 1880年受洗 1881年同志社英学校 1884年ベリーと共に渡米 オベリン大学, ペンシルバニア医科大学卒 英, 仏, 独をへて1891年帰国 同志社病院副院長 ベリーの帰国後同志社病院院長に就任した。1898年神戸にて開業した。Statement: p.3では, “another who is in hearty sympathy with the movement, and who has recently come to this country, will soon enter the Medical Department of the University of Pennsylvania.”とある。
- 48) “MEDICAL EDUCATION IN JAPAN” St. Louis courier of medicine May 1884: p.480
- 49) ステファン (Bishop Stevens 1815-1887) 聖公会ペンシルバニア州の第4代司教 サウスカロライナ医科大学 ダートマス大学で医学を学ぶ ジョージア大学の道徳哲学教授 1865年からペンシルバニア州の司教を務めた。
- 50) ウィリアム・ベッパー (William Pepper 1843-1898) ペンシルバニア大学の臨床医学教授, 19世紀を代表する医学教育の専門家, フェデルフィア自由図書館の創設に尽力した。
- 51) デビット・ハイエス・アグニュー (David Hayes Agnew 1818-1892) 外科医 1838年 ペンシルバニア医科大学を卒業し 1863-1889年までペンシルバニア大学医学部教授を勤めた。
- 52) ウィリアム・ウィリアムス・キーン (William Williams Keen 1837-1932) 米国初の脳外科医 1859年ブラウン大学 1862年ジェファーソン医科大学卒 脳室ドレナージの画期的方法や巨大脳腫瘍の摘出手術をおこなった。ジェファーソン医科大学外科学教授を務めた。
- 53) マーク・ホプキンス (Mark Hopkins 1802-1887) 教育者 1824年ウィリアム大学卒 1836年から1872年までウィリアム大学の総長を務める。倫理学宗教学者であり医師として働いていた時期もある。アメリカン・ボード海外伝道部の総長も務めたことがある。リベラル教育の模範的体制を整えアメリカ教育界を代表する人物でもあった。
- 54) “IN AID OF JAPAN – A Proposition to establish a medical college in that country” The Philadelphia Inquirer June 13.1884
- 55) “MEDICAL INSTRUCTION IN JAPAN” The New York Times June 13, 1884
- 56) “A PROPOSED CHRISTIAN MEDICAL COLLEGE FOR JAPAN” Missionary Herald July 1884. p.267
- 57) フィリップ・ブルックス (Phillips Brooks 1835-1893) ボストン生まれ 1855年ハーバード大学卒 1865年よりポストントリニティ教会司教 1890年代にはマサチューセッツ州の司教を務めた。1884年当時の最も良く知られカリスマ的説教師であり発言力・影響力は絶大であった。
- 58) Berry letter to the Presbyterian foreign board 1884.12.12 Records of U.S. Presbyterian Missions vol.5 Japan letters 1883-1886 No.80 (横浜開港資料館)
- 59) Berry letter to Neesima 1885.1.12 American Board of Commissioners for Foreign Missions. American Board of Commissioners for Foreign Missions Real 327 (同志社大学今出川図書館) 新島遺品庫目録番号2457
- 60) Ballagh letter to the Presbyterian foreign board 1884.9.3 Records of U.S. Presbyterian Missions vol.5 Japan letters 1883-1886 No.65 (横浜開港資料館)
- 61) Knox letter to the Presbyterian foreign board 1884.9.27 Records of U.S. Presbyterian Missions vol.5 Japan letters 1883-1886 No.68 (横浜開港資料館)
- 62) Hearst letter to the Presbyterian foreign board 1885.2.16 Records of U.S. Presbyterian Missions vol.5 Japan letters 1883-1886 No.118 (横浜開港資料館)
- 63) Hepburn letter to the Presbyterian foreign board 1884.12.26 Records of U.S. Presbyterian Missions vol.5 japan letter 1883-1886 No.83 (横浜開港資料館)
- 64) Hepburn letter to the Presbyterian foreign board

- 1885.2.28 Records of U.S. Presbyterian Missions vol. 5 Japan letters 1883-1886 No. 120 (横浜開港資料館)
- 65) Clark letter to Berry 1885.3.25 American Board of Commissioners for Foreign Missions. Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions Real 42 No. 589 (同志社大学今出川図書館)
- 66) Berry letter to Clark 1885.3.27 American Board of Commissioners for Foreign Missions. American Board of Commissioners for Foreign Missions Real 337 No. 118 (同志社大学今出川図書館)
- 67) Berry letter to Neesima 1885.4.11 American Board of Commissioners for Foreign Missions. Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions Real 337 (同志社大学今出川図書館) 66.67の文献は、12の文献 John C. Berry 書簡集でも確認できる。
- 68) モートン (John Thomas Morton 1828-1897) 英国商人、缶詰工場の経営者で富豪にして慈善家であった。1897年の死亡時には、遺産の半分を教会や宣教団等の慈善事業に寄付したという。
- 69) キリスト教主義の医学校 1971年に創設された聖マリアンナ医科大学は、『キリスト教的人類愛に根ざした「生命の尊厳」を基調とする医師としての使命感を自覚し、人類社会に奉仕し得る人間の育成、ならびに専門的研究の成果を人類の福祉に活かしていく医師の養成』を建学の精神に掲げている。
- 70) ウィリアム・ウィリス (William Willis, 1837-1894) は、幕末から明治維新にかけて日本での医療活動に従事したイギリス人医師 (医学博士)、お雇い外国人である。
- 71) 高木兼寛 (1849-1920) 日本の海軍軍人、医学博士男爵で東京慈恵会医科大学の創設者である。薩摩藩郷士の長男として出生、戊辰戦争の際に軍医として活躍する。1870年鹿児島医学校に入学しウィリス医師に認められる。英国聖トーマス病院医学校に留学、在学中に最優秀学生の表彰を受ける。1880年帰国し1881年成医会講習所設立する。脚気の撲滅に尽力し、「ビタミンの父」とも呼ばれる。
- 72) “The Kyoto memorial for the abolition of licensed prostitution on Japan” John C. Berry *The Sei-i-kwai medical journal* 10 (1890): 9-10
- 73) 新島襄全集 5巻 京都：同朋舎；1984. p.288
- 74) ベルツ編 ベルツの手紙、菅沼龍太郎訳 ベルツ在職二十五周年祝賀会でのスピーチ 東京：岩波文庫；1979. p.239

The Movement to Establish a Christian Medical School Proposed by Medical Missionary “John C. Berry”

Tetsuya FUSEDA

Tannan Regional Medical Center

John C. Berry (1847–1936)¹⁾ came to Japan in 1872, worked as a medical missionary for the American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM)²⁾. He attempted to influence Japanese medical education toward a more Christian-influenced approach.

In early Meiji, the Japanese government adopted the German language and principles for its national medical program. This promoted a tendency towards the adoption of German concepts in Japanese medical education. The director of Doshisha, Nijijima, was concerned about such a tendency, which he considered rather science-oriented or skeptical and atheistic, according to his writings. The tradition of corruption among Japanese doctors also deeply disappointed him. Nijijima sought the type of medical institution in which the students would learn Western medicine based on a moral base of Christianity, presumably in Kyoto, to take advantage of the foundation of Doshisha, which had already been built.

Missionaries in Japan, especially Berry, supported Nijijima's intentions. During his visit to the U.S. he promoted a mission statement in support of Nijijima's idea in order to raise funds among Christian communities. This project produced a resolution among the Christian community in Philadelphia to establish an interdenominational foundation for establishing such a medical institution and it encouraged other cities to follow. However, the American Board of Missionaries in Japan disagreed with the idea of its being interdenominational, and then, along with other struggles such as the lack of funding in light of the economic slowdown, and the widespread social rejection of Christianity in Japan, the project fell apart and was suspended.

Key words: John C. Berry, medical missionary, Joseph Hardy Nijijima, Christian medical school, Statement